

5 企画の概要 (和文)

本共同研究は、東ユーラシアの宴に表出する、かれらの社会的文化的特徴を、大国ロシア・中国に挟まれた地理的・文化的な位置づけや、ホストとゲストの間のトランズアクションを手がかりとしながら検討するものである。

人類学では、財の交換や再分配の場、社会的紐帯を高める機能を持つ場として酒宴や共食の重要性が理解されてきた。また、宴研究においては当該地域の象徴的コスモロジーと結びついた宴の空間と、それに対応した社会関係の構造が解明されてきた。現在では、さまざまな規範、理念と人間の実践の表出する場としての酒場や酒盛りに注目し、ローカルで個別な文脈に埋め込まれた、宴や酒そのものの価値を明らかにする諸研究がみられる。

本企画は、こうした研究の流れに位置付けられると同時に、新たに「歓待」および「境界」という概念に注目することにより、東ユーラシアの宴に関する理解を、個別でありながらも、普遍性をもった議論へと接近させたい。すなわち、宴は、自己と他者とが出会い、両者のさまざまなトランズアクションを経て相互の分離／接合が現れる契機であり、そこから諸地域社会における社会性の所在を考えることのできる場なのである。

ここにおいて、「歓待」は、そのことばが喚起する第一義的な理解にとどまらない意味をもつ。すなわち、それは単にホストから招かれたゲストへのもてなしではなく、招かれざる客、よそ者、あるいは敵といった、さまざまな他者との間にも生起する交渉、トランズアクションなのである。本企画では、こうした営みを「交歓」と仮に定義し、諸地域の報告から様々な境界を含む交渉のフィールドとしての宴会、共食、そして日常的な社会生活のあり方を検討する。

モンゴルの宴会は飲酒による酩酊に支えられている一方で、イスラームの規範に基づくテュルク系社会では飲酒が原則として禁じられているという点で、両者の宴会のあり方が異なるが、遊牧という同一の文化的背景をもつ。セッション1では、両社会のローカルな規範と、通底する交歓の原理を探求する。セッション2では、モンゴルとテュルクにおける交歓の原理におけるつながりと差異を考えるうえで、社会主義を経たロシア文化との接触というマクロな文化的背景について考える。中国という大きな文化・経済との接触によって、ローカルな宴にいかなる変化が現れたのかについて比較検討することにも意義がある。

セッション3では、「交歓」における言語のはたらきに注目する。離合集散する遊牧に根差すモンゴルとテュルクの社会生活において、物質文化が少ない代わりに、口承文芸が発達し、研究の対象とされてきた。両社会では、ことばによる交歓が人の集まる場面で非常に重要な接客技法となっている。

3つのセッションのあとは、本共同研究の成果を東ユーラシアの文化・社会・経済・宗教的な文脈においていかに位置付けることができるのかや、東アジア諸社会の宴と集団間の連帯形成にみられる相互影響と共通性に関しても議論し、今後のさらなる共同研究の可能性を探る。

《プログラム》

12:50 趣旨説明 寺尾萌（首都大学東京大学院）

13:00 セッション1 現代モンゴル・テュルクの宴

寺尾萌（首都大学東京大学院）「モンゴルの宴と交歓——婚姻儀礼における両家訪問を事例に」

吉田世津子（四国学院大学）「新しい時代の宴——クルグズスタン・結婚を中心に」

14:20 休憩

14:30 セッション2 宴にみえる文化的境界

伊賀上菜穂（中央大学）「ブリヤート共和国ロシア人古儀式派教徒の追善供養と酒」

阿部朋恒（首都大学東京大学院）「中国雲南省のハニ族における儀礼と食の変容」

15:50 休憩

16:00 セッション3 会話と境界

中村瑞希（筑波大学大学院）「日常と非日常をへだてる言語——ウズベク人社会における二言語使用を事例に」

堀田あゆみ（日本学術振興会特別研究員 PD・関西学院大学）「“歓待”の舞台装置としてのゲルー——モンゴル遊牧社会における他家訪問の事例から」

16:40 コメント 桜間瑛（日本学術振興会特別研究員 PD・東京大学・東洋文化研究所）

三浦哲也（育英短期大学）

風戸真理（北星学園大学）

17:30 総合討論

18:30 閉会の辞 寺尾萌（首都大学東京大学院）